

孔乙己

魯迅

井上紅梅訳

青空文庫

魯鎮ろちんの酒場の構えは他所よそと違つていずれも皆、曲尺形かねじやくがたの大櫃台おデスクを往来へ向けて据え、櫃台デスクの内側には絶えず湯を沸かしておき、爛酒がすぐでも間に合うようになってゐる。仕事をする人達は正午ひるの休みや夕方の手終てしまいにいちいち四文銭を出しては茶碗酒を一杯買い、櫃台デスクにもた靠れて熱爛の立飲みをする。——これは二十年前のことで、今では値段が上つて一碗十文になつた。——もしモウ一文出しても差支えなければ、筍の塩漬や茴香ういきようまめ豆の皿盛を取ることが出来る。もし果して十何文かを足し前すれば、葷なまぐさの方の皿盛りが取れるんだが、こういうお客様は大抵はんでんぎ袴天著みなりの方だからなかなかそんな贅沢はしない。中には身装みなりのぞろりと

した者などあつて、店に入るとすぐに隣接した別席に著き、酒を命じ菜を命じ、ちびりちびりと飲んでる者もある。

わたしは十二の歳から村の入口の咸亨酒かんこうしゅてん店の小僧になつた。

番頭さんの被仰おっしやるには、こいつは、見掛けが野呂間のろまだから上客

の側そばへは出せない。店先の仕事をさせよう。店先の裨天著は取付

き易いが、わけのわからぬことをくどくど喋舌しゃべり、漆濃しつこく絡みつ

く奴が少くない。彼等は人の手許をじろりと見たがる癖がある。

老酒ラオチユを甕の中から汲み出すのを見て、徳利の底に水が残つてい

やしないか否かを見て、徳利を熱湯の中に入れるところまで見届

けて、そこでようやく安心する。こういう厳しい監視の下には、

水を交ぜることなんかとても出来るものではない。だから二三日

経つと番頭さんは「こいつは役に立たない」と言つたが、幸いに周旋人の顔が利き、断りかねたものと見え、改めてお爛番のような詰らぬ仕事を受持たされることになった。わたしはそれから日がな一日櫃台デスクの内側でこの仕事だけを勤めていたので、縮尻しくじりを仕出かすことのないだけ、それだけで単調で詰らなかつた。番頭さんはいつも仏頂面していなさるし、お客様は一向構つてくれないし、これじゃいくらわたしだつて活潑になり得るはずがない。ただ孔乙己こういっきが店に来た時だけ初めて笑声を出すことが出来たので、だから今だにこの人を覚えている。

孔乙己は立飲みの方でありながら長衫ながぎを著た唯一の人であつた。彼は身の長けがはなはだ高く、顔色が青白く、皺の間にいつも傷

痕が交つていて胡麻塩鬚が蓬々ほうほうと生えていた。著物は汚れ腐つて、ツギハギもせず洗濯もせず、十何年も一つものでおつとおしているようだ。彼の言葉は全部が漢文で、口から出るのは「之ツーフ乎者也」ばかりだから、人が聞けば解るような解らぬような変なもので、その姓氏が孔というのみで名前はよく知られなかつたが、ある人が紅紙の上に「上じょうたいじん大人孔乙己」と書いてから、これもまた解るような解らぬようなあいまいの中に彼のために一つの確たる仇名が出来て、孔乙己と呼ばれるようになった。

孔乙己が店に來ると、そこにゐる飲手は皆笑い出した。

「孔乙己、お前の顔にまた一つ傷が殖えたね」

とその中の一人が言った。孔は答えず九文の大錢を櫃台デスクの上に

並べ

「酒を二合爛つけてくれ。それから豆を一皿」

「馬鹿に景気がいいぜ。これやテツキり盗んで来たに違いない」

とわざと大声出して前の一人が言うのと、孔乙己は眼玉を剥き出し

「汝はなんすれぞ斯くの如く空くうに憑よつて人の清白を汚す」

「何、清白だと？ 乃公おれはお前かが何家の書物を盗んで吊し打ちになつたのをこないだ見たばかりだ」

孔は顔を真赤にして、額の上に青筋を立て

「窃せつしよ書は盗みの数に入らない。窃書は読書人の為す事で盗みの数に入るべきことではない」

そうして後に続く言葉はとても変挺なもので、「君子固より窮す」とか「者ならん乎^か」の類だから衆^{みな}の笑いを引起し店中^{にわか}俄に景気づいた。

人の噂では、孔乙己は書物をたくさん読んだ人だが、学校に入りそこない、無職で暮しているうちにだんだん貧乏して、乞食になりかかったが、幸いに手ずじがよく字が旨く書けたので、あちこちで書物の浄写を頼まれ、飯の種にありつくことが出来た。ところが彼には一つの悪い癖があつて、酒が大好きで飲みだすと怠け出し、注文主も書物も紙も何もかも、たちまち^{うち}の中に無くしてしまう。こういうことがたびたびあつて、終^{しま}には字を書いてくれないという人さえ無くなった。そこで日々の暮しにも差支え、ある場

合には盗みをしないではいられなくなつた。けれどもこの店では、彼は誰よりも品行が正しく、かつて一度も借り倒したことがない。現金のない時には黒板の上に暫時書き附けてあることもあるが、一月経たぬうちにキレイに払いを済ませて、黒板の上から孔乙己の名前を拭き消されてしまうのが常であつた。

さて孔乙己はお碗に半分ほど酒飲むうちに、赤くなつた顔がだんだん元に復して来たので、側そばにいた人はまたもやひやかし始めた。

「孔乙己、お前は本当に字が読めるのかえ」

孔乙己は弁解するだけ阿呆らしいという顔付で、その人を眺めていると、彼等はすぐに言葉を添えた。

「お前は どうして 半人前の 秀才にも なれない のだろう」

この言葉は 孔乙己にとっては大禁物で、たちまち不安に堪えられぬ憂鬱な状態を現わし、顔全体が灰色に覆われ、口から出る言葉は 今度こそソツクリ丸出しの「ツーフーツエイエ之乎者也」だから、こればかりは誰だつて解るはずがない。一同はこの時どつと笑い出し、店の内外は とても晴れやかな空気になるのが常であつた。

この場合わたしが一緒に なつて笑つても 番頭さんは 決して 咎めないし、その上 番頭さん自身 がいつも こういう 問題を持出し、人の笑いを誘い出すので、孔乙己は なかまはず仲間脱れになるより 仕方がない。そういう時には いつも 子供を相手にして 話しかける。一度わたしに話しかけたことが あつた。

「お前は本が読めるかえ」

「……………」

「本が読めるなら乃公が試験してやろう。茴香豆の茴の字は、どう書くんだか知ってるかえ」

わたしはこんな乞食同様の人から試験を受けるのがいやさに、顔を素向^{そむ}けていると、孔乙己はわたしの返辞をしばらく待った後、はなはだ親切に説き始めた。

「書くことが出来ないのだろう、な、では教えてやろう、よく覚えておけ。この字を覚えていると、今に番頭さんになった時、帳附けが出来るよ」

わたしが番頭さんになるのはいつのことやら、ずいぶん先きの

先きの話で、その上、内の番頭さんは茴香豆という字を記入したことがない。そう思うと馬鹿々々しくなつて

「そんなことを誰がお前に教えてくれと言つたえ。草冠の下に回数の回の字だ」

孔乙己は俄に元気づき、爪先きで櫃台デスクを弾はじきながら大きくうなずいて

「上出来、上出来。じゃ茴の字に四つの書き方があるのを知っているか」

彼は指先を酒に浸しながら櫃台の上に字を書き始めたが、わたしが冷淡に口を結んで遠のくと真から残念そうに溜息つを吐いた。

またたびたび左さのようなことがあつた。騒々しい笑声が起ると、

子供等はどこからとなく集あつまつて来て孔乙己を取囲む。その時茴香豆は彼の手から一つ一つ子供等に分配され、子供等はそれを食べてしまったあとでもなお囲みを解かず、小さな眼を皿の中に萃あつめていると、彼は急に五指をひろげて皿を覆い、背を丸くして

「たくさん無いよ。わしはもうたくさん持つてないよ」

というかと思うとたちまち身を起し

「多からず、多からず、多おお乎哉多らんやからざる也」

と首を左右に振っているの、子供等はキャツキャツと笑い出し、ちりぢりに別れゆくのである。

こういう風に孔乙己はいつも人を愉快ならしめているが、自分は決してそうあるはずがない。ほかの人だったらどうだろう。

こうしていられるか。

ある日のことである。おおかた中秋節の二三日前だったろうと思う。番頭さんはぶらりぶらりと帳めめに掛り、黒板を取卸して、たちまち大声を出した。

「孔乙己はしばらく出て来ないが、まだ十九銭残っているよ」
そこでわたしもしばらく彼の見えないことを思い出したが、^{そば}側に酒飲んでいる人が

「あいつは来るはずがない。腿の骨をぶつ挫いちやったんだ」
「ええ、何だと」

「相変らず泥棒していたんだ。今度はあいつも眼が眩んだね。ところもあるうに丁^{ていきよじん}拳^{うち}人の家に入ったんだから、な。あすこの品

物が盗み出せると思うか」

「そうしてどうした」

「どうしたツて？ 謝罪状を書くより外はほかあるめえ。書いたあとで叩かれ、夜中まで叩かれどおしで、もう一度叩かれたら、ポキリと言って腿の骨が折れてしまった」

「それからどうした」

「それから腿が折れたんだ」

「折れてからどうした」

「どうしたか解るものか。たぶん死んだろう」

番頭はその上訊こうともせず、のらりくらりと彼の帳合を続けていた。

中秋節が過ぎてから、風は日増しに涼しくなり、みるみるうちに初冬も近づいた。わたしは棉わた入いれを着て丸一日火の側そばにいて、午後からたった一人の客ぐらいでは睡まぶたがだらりとせざるを得ない。するとたちまちどこやらで

「一杯爛けてくれ」

という声がした。よく聞き慣れた声だが眼の前には誰もいない。伸び上つて見ると櫃台の下の闕しきいの上に孔乙己が坐っている。顔が瘠せて黒くなり何とも言われぬ見窄みすぼらしい風体で、破れ衾一枚著て両膝を曲げ、腰にアンペラを敷いて、肩から縄で吊りかけてある。

「酒を一杯爛けてくれ」

番頭さんも延び上つて見て

「おお孔乙己か、お前にまだ十九銭貸しがあるよ」

孔乙己はとも見惨みじめな様子で仰向いて答えた。

「それはこの次ぎ返すから、今度だけは現金で、いい酒をくれ」
番頭さんは例のひやかし口調で

「孔乙己、またやったな」

今度は彼もいつもと違つて余り弁解もせずにとだごん一言

「ひやかしちやいけない」

というのみであつた。

「ひやかす？ 物を盗らないで腿を折られる奴があるもんか」

孔乙己は低い声で

「高い所から落ちたんだ。落ちたから折れたんだ」

この時彼の眼付はこの話を二度と持出さないように番頭さんに向つて頼むようにも見ええたが、いつもの四五人はもう集つていたので、番頭さんと一緒になつて笑つた。

わたしは爛した酒を運び出し、鬩の上に置くと、彼は破れたポケットの中から四文錢を掴み出した。その手を見ると泥だらけで、足で歩いて来たとは思われないが、果してその通りで、彼は衆みなの笑い声の中に酒を飲み干してしまうと、たちまち手を支えて這い出した。

それからずっと長い間孔乙己を見たことがない。年末になると、番頭さんは黒板を卸して言つた。

「孔乙己はどうしたろうな。まだ十九銭貸しがある」
次の年の端午の節句にも言った。

「孔乙己はどうしたろうな。まだ十九銭貸しがある」
中秋節にはもうなんにも言わなくなつた。

それからまた年末が来たが、彼の姿を見出すことが出来なかつた。そして今になつたが、とうとう見ずじまいだ。

たぶん孔乙己は死んだに違いない。

(一九一九年三月)

青空文庫情報

底本：「魯迅全集」改造社

1932（昭和7）年11月18日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「彼奴↓あいつ 或（る）↓ある 大方↓おおかた く置き↓く
おき 曾て↓かつて 位↓ぐらい く呉れ↓くくれ 此奴↓こい
つ 此↓この 偕て↓さて 暫く↓しばらく 仕舞う↓しまう
終い↓じまい 随分↓ずいぶん 其↓その 沢山↓たくさん 只

↓ただ 忽ち↓たちまち 多分↓たぶん 何処↓どこ 迎も↓と
 ても 中々↓なかなか く取つて↓くにとつて 筈↓はず 甚
 だ↓はなはだ 程↓ほど 又・亦↓また 未だ↓まだ 見る見る
 ↓みるみる 若し↓もし」

※底本は総ルビですが、一部を省きました。

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（上村要）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2005年5月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

孔乙己

魯迅

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 井上紅梅訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>